

青鳳会 素靈難ガイドス 6 平成 28 年 7 月 25 日

素問と靈枢の出版史

青鳳会講師 吉野久

【はじめに】

鍼灸の古典書を語るうえでは、その研究について語る場合と、刊行について語る場合がある。今回「素問と靈枢の歴史」ということで話をする機会に恵まれたが、ここではいつも話をしている研究史ではなく、刊行の歴史についての話をし、古典書についての理解を深めることが肝要だろうという考えに至った。

幸いに、最近では茨城大学教授・真柳誠氏の黄帝医籍にかんする詳細な研究に、われわれも接することができるようになったので、この度は、主にこれをもとに話をしてみたい。

※以下、両書の刊行状況が分るように同じ時代のトピックを併記し、素問については黒字、**針経・靈枢については茶色字**で表わした。緑字は注記である。

【伝説】

①漢書・芸文志に「黄帝内経十八卷」の著録がある。

②傷寒論・張仲景序に「素問、九卷、八十一難」の書名がある。(3世紀初)

③甲乙経・皇甫謐序に「黄帝内経十八卷」とは「針経九卷」と「素問九卷」であると説いた。「黄帝内経」が「素問」と「針経」であるという推測の端緒となった。
(事実は未詳。甲乙経自体は、4世紀後半に無名氏が編纂して原序を付し、7世紀初頭に序ともども皇甫謐の撰に仮託された)

皇甫謐(215年～282年)は、後漢の武将として有名な皇甫嵩の曾孫である。官職には就かず、著述に専念した。寝食を忘れて書を読み、「書淫」と呼ばれたという。西晋の武帝は何度も皇甫謐を招いたが、皇甫謐は仕官を断った。皇甫謐が武帝に対して本を借りたいと申し出たとき、武帝は車一台の本を与えたという。

④王叔和「脈経」卷三(3世紀後半) 経文の出典に「右素問、針経、張仲景」などと記す。

先秦時代から蓄積されてきた医学知識と記録が、複雑な経緯をたどり、諸文献に集積されていたのは間違いなく、その一つが前漢の「黄帝内経十八卷」だったといえる。

これら基礎文献からの取捨選択・整理をへて後漢の1世紀前後までに「素問」の書名と原内容、2世紀前後までに「九卷」(ないし「針経」あるいは現「靈枢」の祖本)の書名と原内容が成立した。

【 歴 史 】

- ① 全元起(500 年前後)が、訓解や篇順の整理をくわえ、『黄帝素問』八巻を編纂した。(全元起本、北宋以降に散佚)
- ② 唐代では王氷が全元起本も参照し、各篇「次」をほどこし、「注」をくわえた「次注本」を編纂し『黄帝素問』二十四巻とした(762 年序)。この王氷次注本も現存しない。
 - (1) 王氷は「素問」の序で、漢書・芸文志のいう「黄帝内経」十八巻の内容が、「素問」と「靈枢」であるとしている。
 - (2) 運氣篇について
王氷増入の第七巻＝現行素問の巻 19～22 の運氣七篇(中国で七篇大論)。新校正で王氷の増入とみなされた「六節蔵象論 9」の前半も、運氣篇のひとつと見なされるようになった。

○運氣篇は五行説を駆使するが、五行関連の条文を類偏した隋の「五行大義」に引用されていない。
○ 運氣篇以外の王氷注は、運氣篇の経文をいっさい引用しない。
○ 運氣篇の影響は北宋から始まり、唐代までの医学には痕跡がない。
上の三点から、五代(唐末)～北宋初期に運氣篇の経文が作成され、注文も王氷の名に託して偽作され、最後に改変された王氷序ともども北宋初期の段階で次注本に加えられたのではないか。(山田慶児)
- ③ 北宋では校正医書局による校正が 4 度行なわれ 3 度の校定本『黄帝内経素問』が出された。(11～12 世紀初) この時、全元起本、王氷次注本も参照されている。
 - (2) 針経についても、本格的に校正が試みられたのは北宋においてであるが、宋朝の所蔵していた針経は、欠落・欠本の多い零細な「針経」一巻というものであった。
その後、高麗からの将来本をもって、秘書監(秘書省長官)・王欽臣が「黄帝針経」の刊行をするよう上申した。[1093 年 元祐本「針経」、現存しない]

北宋の校正医書局

高保衡…高若訥(枢密使、997～1055、『素問誤文闕義』一卷、『傷寒類要』四巻)の次男
林億…高若訥の女婿
孫奇…太医令・孫用和の長男。
孫兆…孫用和の次男。高若訥の門下。

「臣億等按」と書き出す「甲乙経」や全元起本との校異注が 4 箇所あるだけなので、「新校正云」と書き出す数多くの注は、孫兆が担当したのではないかと考えられる。

ここで宋代とはどんな時代であったのかを、宮崎市定「中国史」(岩波文庫)によって見てみたい。

唐の都の長安の街中の様子というものは、東京の丸の内のようなもので、左右にただ長い牆壁が続くだけのものだった。長安の城内は百数十の坊と呼ばれるブロックに分けられ、坊自体が周囲に牆壁をめぐらした一種の城であった。東西南北の坊門から中に入ると、はじめて民居に接することができ、商売は東西に設けられた特別の区画でのみ許された。

ところが宋の都の開封は、城内の大部分が東京でいえば浅草の繁華街のようなもので、道路の両側には商店や出店がならんでいた。

毎朝四時ごろになると夜行の禁が解かれ、城門・城内の関門がいっせいに開かれて、民衆がぞくぞくと道路へくりだした。芝居や見世物小屋があつまり、講談・手品・曲芸・影絵などが演ぜられた。食道や酒屋もいたるところにあり、毎月五回市が立つ相国寺の境内には、珍禽奇獣のペットの市や、敷物、籠箱、桶盥などの日用品から、鞍轡弓劍の武具にいたるまで無いものはない。もう一つ、宋を宋たらしめた書籍、玩好、凶画、筆墨のたぐいは豊富に売られていた。

こうした市井の好景気は官界においても同様で、官制のかさ上げをして新ポストをつくる、人員を増やす、事あるごとに種々の格別の賜与をふるまうといったことが状態で、これは「豊亨豫大(ほうこうよだい)」と呼ばれ、「官爵を視ること糞土の如し」と称された。一言でいって、非常な好景気の時代だったのである。

- ④ 北宋が金に滅ぼされ(1126年)、首都に保存されていた③の版木も持ち去られた。そのため、南宋では二度目の校定本(熙寧本)を覆刻して、新たに素問を行刊した(紹興本)。
- (3) 針経は南宋時代、有力な民間医である史某(しすう)の上申により、皇帝の侍医・王継先の主導で素問とともに合刻、公刊された。『重広補註黄帝内経素問靈枢』[重広…二書の合刻の意] <紹興本、現「靈枢」の祖本>

※史某が民間医でありながら由緒ある「針経」の書名を変更して「家藏の旧本『靈枢』九卷」と記すことはありえない。また典籍を管理する秘書省ができることでもなかった。巻数を素問二十四巻と同一にしたこととともに、これは当時絶大な権力を持っていた高宗の侍医・王継先のアイデアであった。王継先はこうすることによって、素問と靈枢こそが「黄帝内経」であるという王冰序の主張にしたがって、漢書・芸文志の「黄帝内経」を再現することに成功した。
(医籍研究 p225.231)

史某と王継先

靈枢の史某序に「・・・国子監令某、専訪請名医、更乞参詳・・・」とある。南宋の秘書省は蔵書と校書、国子監は出版を担当した。国子監が史某に命じて参詳を懇願させた「名医」すなわち、当時の最高医とは、高宗を籠絡したため佞幸と称された王継先(1098～1181)が第一に想起される。

王継先は南宋の高宗(位 1127～62)に侍医として仕え、幸医・国医・王医師と呼ばれた。1142年、金との和平で拉致から送還された顕仁太后(北宋皇帝・徽宗の妻、高宗の生母)の病を治し、さらに寵を得て高官を歴任し、絶大な権力を数十年ふるった。金との和平を実現させた専制実権者・秦檜も王継先と義兄弟をむすび、高宗に「国事は(秦)檜、家事は(張)去為、一身は(王)継先に委ねる」と言わしめ(張去為は宦官頭で、高宗の最側近のひとり)、この三人が紹興中後期の中枢を牛耳っていた。

靈枢・史某序(部分)

諸書を参對し、家藏の舊本靈枢九巻ともども八十一篇の校正を再行し、音釋を譬修して巻末に附し、勒(まとめ)て二十四巻と爲す。庶使好生之人、開卷易明了、無差別除已。(未詳) 状を具(そな)え、所屬を経て明外を申し、使府の指揮に准(したが)い、條(規則)に依り、奮運司に申し、詳定を選官し、書を具えて秘書省に送る。国子監、某をして専(ただ)に名医訪い請わしめて、更に参詳を乞わしめ、誤りを免れしめて、利益の無窮を将来せしむ。

功實、おのずから有り。

- ⑤ 北宋で校定された素問はいずれも現存していないが、熙寧本(北宋)を祖本とする紹興本(南宋)をもとにして、金、元でも素問が出され、この中には現存するものがある。
- ⑥ 明代では宮廷に仕えていた顧從徳が、⑤の紹興本をもとにして素問を覆刻した。顧從徳の缶宋本が善本であることは常識となっている。北京、台北などに現存。

嘉靖 29 年(1550 年)顧從徳缶宋本

底本は紹興本(1155 年)であり、その祖本は徽寧本(1069 年)である。

「天下之意甚切朋欲廣其佳本公、暇(手の空いたとき)校讐至忘寢食、予小子敢遂翻刻」
「天下の意、甚だ切朋にしてその佳本を公に廣めんことを欲す。ひまひまに校讐するも、寢食を忘るるに至り、予小子、敢えて遂に翻刻す」

顧定芳(1489～1554)と顧從徳

1993 年 2 月から 4 月にかけて、上海の打浦橋で七基の明墓が発掘され、その一基が顧定芳のものであった。顧家は代々上海の名家で、定芳は世宗(嘉靖帝)の太医院御医となり、聖濟殿御薬房に勤務、官位は修職郎にのぼっている。入手した宋版「医説」十卷(1228 年)を家伝の秘とせず影刻した(1544 年)ことでも知られ、その序では素問の重要性を幾度も強調している。

定芳には六男三女があり、長男・從礼の墓からは、その妻ともども未腐乱の乾屍(もと湿屍)として出土して話題となった。

從徳は二男で官位は鴻臚寺序班にいたった。鴻臚寺は朝廷儀礼の主管庁で、序班は儀礼時に官僚班位の整理をつかさどる職であった。從徳は素問の影刻以外に、秦漢の古印 1750 方を劔した「集古印譜」四巻も出版している(1572 年)。

三男・從仁も金石家・収蔵家として知られ、顧定芳一家には好古の風があり、それが宋版医書の影刻にも通底する。
(季刊内經・真柳誠)

江戸時代の日本でも何冊かがあったことが森立之・澁江抽齋『經籍訪古志』に著録されている。澁江抽齋の所蔵というものもあったが、「澁江氏の顧本は、久志本氏これを滅して和刻本と成す」と、覆刻して和刻本を公刊したことが記されており、「實に惜しむべし」とも添えられている。

久志本氏とは、もと伊勢の神官であったが、徳川家康の侍医として江戸へ来たり、久志本左京家を興した。

付「日本内経医学会版「素問」と「靈枢」について」

この度、青鳳会でも素問、靈枢などの古典成書を取り扱うことになったので、皆さんの手もとにある日本内経医学会版の素問、靈枢について見てみよう。

現在、世に伝わっている「素問」と「靈枢」は、南宋代に刊行された『重広補注黄帝内経素問靈枢』以外には、まずない。ことに「素問」は明代に顧從徳が刊行したものだけであろう。

内経医学会版の「素問」も、この流れに沿ったものである。封面を見ると「四部叢刊」とあり、上海涵芬楼が明の顧氏の翻宋本を影刻した、とある。

商務印書館 上海 1902年 張元濟(1867～1959) 初期には主に商業簿記を取り扱っていたので、「商務」の名がある。

『辞源』『四部叢刊』

涵芬楼…商務印書館内の図書館 張元濟による

中華書局 上海 1912年 陸費逵(りくひき)

『辞海』『四部備要』

上海辞書出版社 上海古典籍出版社

また最終頁をみると、一行削除されて9行になっているのが分るが、これは顧定芳校記の一行を版木から削除したものである。これは顧氏明本を宋本と偽って、売買に際して値を吊り上げるためになされたことと推量される。〈写真1〉

一方、天宇堂出版から刊行されている「素問」を見ると、この校記がある。初刻本にはこの校記がなかったことを考えると、これが真性の補刻本の姿であることが分る。〈写真2〉

双方の匡郭を見比べると、同じ箇所が欠けていることも分り、同一の版木を使って印刷されたことも分る。〈写真1,2の○で囲った箇所〉

また補刻本で顧定芳校記をあとから入れ木したとあるが、当一行だけ、版木がわずかに短くなっていることも分って興味ぶかい。これは、版木がかならず横目方向で用いられ、やわらかい生木のうちに彫刻し、硬く乾燥させてから印刷するので、天地寸法で必ず2～4ミリ縮小する事情によるものである。したがって入れ木による補刻の場合は、必然的に天地方向の縮小が出るという。〈写真2の「明」字の上の白丸で囲った箇所〉

顧氏初刻本：顧從徳の跋文(二葉)のみで、顧定芳の校記なし。

補刻本：定芳の校記(1行)が、最終頁にある。

顧從徳跋の二葉は本文と連続しない単独であるため、抜き去られても不審が生じない。こうした理由によってか、顧從徳跋を書頭に配する本もある。のち、二度目の彫版では定芳校記を入木で補刻した。

内経医学会版「靈枢」については、「炳卿珍藏」の蔵書印があり、「炳卿」は内藤湖南博士の号である。

《参照》

真柳誠『黄帝医籍研究』汲古書院 2014 年

真柳誠『素問』版本研究(その一)～(その四) 「季刊内経」 No.188～191